

宮川村の民俗文化財

野村 恢司



1. 蒐集の動機と経過

昭和25年通産省の第3、4次包蔵水力開発計画に伴い、昭和27年から関西電力株式会社によって村内全般にわたって発電工事が始まった。この発電所工事により家屋の水没は免れず村外への移住がみられた。

又、建設労働者の大半が民家を借りて宿泊した。農業を中心とした家屋は大改築され、このため生活様式に大きな変化が見られた。昭和30年から40年代にかけて日本の経済は急激な成長を遂げ、村でも生活環境が大きく変化し、家屋の増改築が急速に進められ、同時に若者の都会流出が著しくなり、多くの家族が村を離れ過疎が一段と進行し、これが起因して、日常生活に関する風俗、習慣や実用の日常生活用具等、貴重な民俗文化財が人々の気づかぬままに消滅あるいは変質していった。

村ではこの実態に着目し蒐集の気運の高まる中で、社会教育事業の一環として高齢者学級に位置づけ、他地域にある民俗資料館の視察をするとともに「民具の見方とその心」について学習し、保存の重要性と提供の意識の高揚に努めた。又、民具の補修と復元、使用研究が続けられ、こうした成果によって1万3千点の民具の蒐集に成功した。蒐集活動を続けるなかで本村は豪雪地帯とあって積雪期に関連した用具が豊富で手づくりのものが多いことに着目し、これらを国指定民俗文化財として価値の高いものにならないかと、諸先生方にご指導を願って申請の作業を進め、昭和62年3月重要有形民俗文化財として2千8百点が国指定を受けた。

2. 自然的、社会的条件 宮川村は日本海型の気象、風土や生活様式では北陸地方型に属し

ており、冬季の気象条件は非常に厳しい地方である。河川(宮川)は村の中央部を縦断し北に流れて日本海に注いでいる。この宮川流域は、日本海から吹きつけてくる雪が阿白山地に真正面からぶつかって大雪となり、降雪も多少の増減はあるが、多い所では年間20メートルを越す豪雪地帯である。昔は冬の期間が長く夏に作物が実らず凶作に悩まされることが多く、苛酷な風土に生き抜いてきた所である。生活は貧しく、生きることが精一杯であった。長い冬の雪の中での生活は、1年の働く準備期間でもあって、穀物の脱穀調整、牛馬の世話、藁細工、屋根の雪下ろし、雪道づくり、特に雪を利用しての仕事では実際に使われた用具に特色のあるものが多く興味深い。このような厳しい地理的条件での生活を営んだ先人達の伝統は温かい人間性、勤勉、協同の精神を培い、豊かなものであったことであろう。

3. 管理運営 平成2年4月1日郷土文化伝習館(資料館)がオープンし、同年10月収蔵庫が完成、翌3年12月茅葺き家屋1棟を移築し、現在3棟にそれぞれ民具を展示、又は収蔵し、管理を行っている。民具の展示については、常に見る人の身になって分かりやすくきめ細かい配慮をしながら、ぬくもりのある資料館となるよう心がけている。本年から埋蔵文化財管理センターの建設が始まり、現在の資料館と併設されることになっている。こうなると今までの民俗資料との関連性をどうつけていくかが、今後に期待をかけながらも課題となる。歴史の業務は目標はあっても到達のない奥深いものがあり、関係の皆様のお指導をよろしく願います。

(前宮川村教育長)

第60回公開講座報告

筏を流す — 尾張藩享保改革の林政政策 —

と き 平成6年5月29日

と き 岐阜県博物館

講 師 松田之利 氏

本年度第1回の公開講座は、岐阜県博物館で開催されている特別展「川に生きる」の講演会と兼ねて実施しました。講師の松田先生は、かつて徳川林政史研究所研究員として活躍され、現在は岐阜大学教養部に在職されて、幕末維新期の社会史や民衆運動史を中心に研究を進めておられる方です。



◎ 講演要旨

「法隆寺を支えた木」(NHKブックス)によれば、法隆寺を建立する時には、すでに近隣に大木が無くなっており、かなり遠くから用材を運んでいる。中近東のレバノンには、かつてレバノン杉の大木が繁茂しており、それで大船を建造して海上で活躍していたが、いまやその地の大部分は荒涼とした砂漠と化している。また、タイでは、かつて国土の半分を占めていた森林が15%以下に激減し、現在、ユーカリ大規模植林計画で混雑が生じている。

人間の活動と森林面積の減少・砂漠化の進行とは強い相関関係がある。尾張藩の享保改革期における林政政策を探ることで、今後の人間と

木とのあるべき関わり方を考察する。

戦国時代末期から近世初期にかけて大規模な城や城下町が全国各地に建設された。城は、それまでの防衛用の山城から、政治を執る場としての平山城や平城にかわり、安土城や姫路城のような巨大な城が出現した。城には、多数の建物を建築するための用材以外、石垣の沈下防止用の木製枠組みを設置するために、大量の土木用材が必要であった。また、領主は積極的に城下町を建設したため、大量の材木が建築資材として必要になった。こうして、江戸時代初期には大建築ブームが訪れ、木材の需要の高まりとともに、その商品化も進んだ。

その材木の供給地は次第に人里を難れていった。材木の供給地の条件としては、重く、かつ大きな材木を大量に流送することが可能な河川があること、江戸をはじめ、京、大阪といった大消費地への輸送ルートが開けていることなどがある。

例えば、冬季のオリンピック会場となり木の伐採問題で揺れている志賀高原の岩菅山は、江戸時代初期には、木を伐採しても越後に流送する以外になかった。また、宮峠以北の飛驒の山々(北方山)の木も、神通川を利用して富山湾に流送する以外になく、材木の供給地となることはできなかった。その点、木曾及び宮峠以南の飛驒の山々(南方山)の木は、木曾川、飛驒川を利用して伊勢湾に流送し、白鳥湊から江戸に回送できた。しかし、近世初期までは東大寺用の大材などは、木曾川から長良川～揖斐川～牧田川を經由し、船附、栗笠、鳥江の濃州3湊(後には大垣湊が加わる)から琵琶湖畔の湊まで陸送するというルートをとったようである。ともかく木曾や飛驒の南方山は、江戸時代初期には材木の供給地になった。木曾は、当初、

幕府領であったが、元和元年(1615)に尾張藩領となった。藩の記録によれば、承応3年(1654)の木曾材の売買利益は7万3千石に相当している。尾張藩の石高が62万石であることからしても、その利益の巨大さが分かる。

大量の材木の伐採や輸送には、専門的技術を持った多くの労働者と巨大な資本が必要である。江戸時代初期にこの仕事に携わったのは代官的豪商で、代表的な人物に紀伊国屋文左衛門、角倉了以等があり、岐阜には福東新田を開発した中島両以がいた。彼等は、代官として年貢の徴収をしたり、新田開発をして地主経営をしたり、河川改修を請け負ったり、国内にとどまらず、何百人もの部下を海外に派遣して貿易をしたりする、武士兼地主兼商人といった人物であって、こうした大資本と多量の労働力を駆使できる者だけが投機的材木御用達たりえたのである。

また、領主が在地の「土木業者」や「輸送業者」等を組織して材木の輸送をさせることもあった。秀吉による墨俣のいわゆる一夜城築城、領主が国単位で技術者や労働力を徴発して採材から築城までを行ったのが慶長11年(1606)の江戸城、12年の駿府城、15年の名古屋城築城などである。

江戸時代初期の城下町建設も一段落し、秀吉・家康以来の兵農分離が進むと、代官的商人は姿を消していった。

寛永19年(1642)に、飛騨川の金山や下麻生役所、長良川役所で材木改めをする時に、通過する材木にかかる通行税(役銀)の基準を記した手帳(手鑑)が作成されたのもそうした動きと照応している。つまり、それまでは、尾張藩の役銀徴収は大商人が請け負うというものであったが、これ以後はそうした商人にたよらずに、領主が河川運輸を直接把握するようになったことを意味していたからである。

寛文5年(1665)、尾張藩は、錦織(現八百津)の綱場を管理していた山村氏を解任した。木曾福島の関所を管理する幕臣であり、かつ、木曾氏の旧臣として、在地性の強い中世的系譜をひ



く山村氏の解任は、尾張藩による材木の伐採・流送の直轄支配を意味している。

それはなぜであろうか。17世紀後半には材木の商品化がいよいよ進み、木曾の領民が採取することが許されていた6000駄の白木(伐採した木の切り株や末木、枯れ木などで、主に曲物などの細工に用いる)は売れなくなっていった。木曾以外の産地の材木が市場に続々と参入してきた結果であろう。

他方で、江戸時代初期からの大量の伐採により、木曾では大材が枯渇してしまった(尽山化)。奥地に入れば大材はあっても、手間賃のため高価になり、他領の材木に太刀打ちできなかった。こうして、尾張藩では、享保期(1716~1736)になると、それまでの林業政策を変更し、留木・留山等の育林事業にのりだした。流す筏の量が減少したためか、木曾川各所にあった川並番所も廃止され、美濃側では円城寺に、尾張側では北方に奉行所がそれぞれ置かれ、河川を一括管理するようになった。

尾張藩の林業政策や河川の材木運輸管理の「整備」とはこのように尽山化に対応したものであったのであり、これらの「整備」によって、木曾の民は、山中に住みながら山稼ぎのできない山の民として明治にまで至るのであった。

(公開講座委員 野原薫)

第28回会員研修会報告

「新しい展示・博物館づくり」をめざして

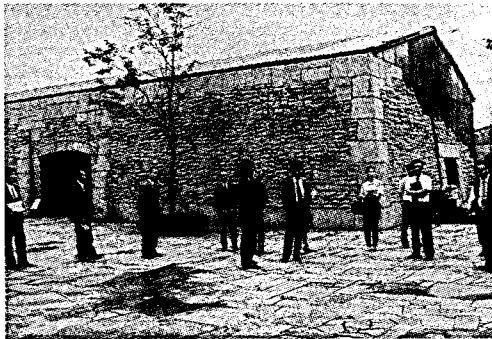
第28回岐阜県博物館協会会員研修会を、平成6年6月13日(月)に、恵那郡蛭川村田原の博石館を会場に開催しました。

(1) 「新しい展示を求めて」

講師 博石館 小林 幸典学芸員

小林学芸員の案内で博石館の施設を実際に回りながら、博物館施設の建築方法、基本コンセプト、それを生かす展示の取り組み、特に配慮したことなどについて説明を受けました。丸ごと手づくりの博物館ともいえる博石館の魅力がよくわかりました。

本館では、蛭川村から産出する鉱物を中心に、世界各地の貴重な鉱物、珍しい鉱物あるいは宝石やその原石が展示してあります。ここでは、見学順路に特に注意をし、興味関心の高いものから展示するように工夫したとのこと。蛭川産の巨大なペグマタイトが見事でした。



みかけ館は、もともと工場でしたが、正面の壁を花こう岩に積み直してイメージを変え、石材としての御影石、石材切り出し用具、石材の歴史などが展示してあります。

その他の施設として、ピラミッド、ストーンパーク、5000人コロシアム、ローソクとたきぎの部屋などがあり、石との触れ合いをテーマに多岐にわたっています。特に、宝石探り体験は、研修会参加者も体験しましたが、小林さんに促されるまでその場を離れることができない

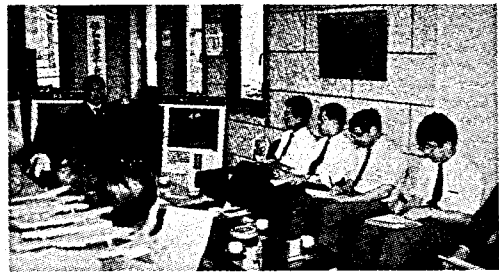
いほど楽しいものでした。きっと人気が高いと思われれます。

(2) 新しい博物館づくり

講師 博石館 岩本 哲臣館長

館長であり、株式会社岩本の社長でもある岩本氏に、大変多忙な中、研修会のために特に時間をさいていただき、新しい博物館づくりについて熱弁をふるっていただきました。

そもそもこの博物館は、日本に石の文化を創造し、育てていきたいということ、さらにすすんで、多くの人達に石の魅力を伝えたいという願いが建設の出発点であり、観光が目的ではありませんでした。また蛭川村は、日本でも有数の鉱物産地であり、これら貴重な鉱物を収集し展示することも大切な目的の1つということでした。



このような博石館に多くの人を訪れるためには、お客様にリピータになってもらうような工夫が必要です。そのためには、単に展示だけでなく来館者が参加できる施設、空間をどんどんと広げていくことと話されました。現に、博石館の敷地内は、今も建設中の施設がいくつかあります。しかも、これらの施設はできる限り手づくりに行っているとのことでした。

お話しのと、参加者からいくつかの質問があり、それらにも大変熱心に答えていただきました。今回の研修も大変有意義であったとみなさん満足されていました。

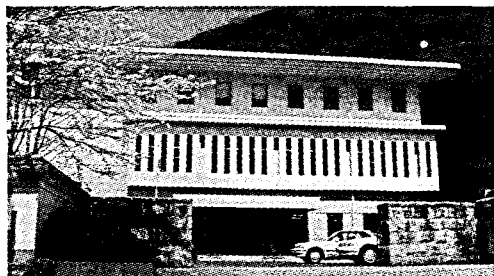
(研修委員 下畑五夫)

岐阜県歴史資料館

〒500

岐阜市夕陽ヶ丘4

TEL (0582)63-6678



金華山の南麓に、豊臣秀吉の軍師であった竹中半兵衛の居城岩手城の陣屋門を模した白亜の建物が、岐阜県歴史資料館です。

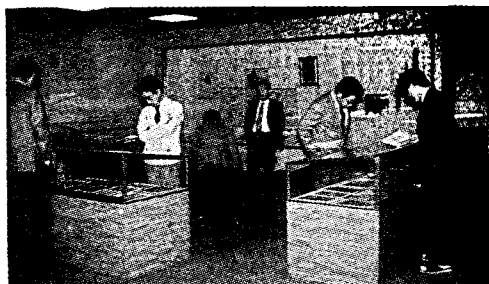
本館は、昭和38年から始まった岐阜県史編纂事業の過程で収集・調査された膨大な古文書を中心とする歴史資料の保存が緊急の課題として浮上し、多くの方々の熱意と尽力によって、これら貴重な歴史資料を永久保存し、有効に活用することを目的として昭和52年に開館しました。

現在収蔵されている歴史資料は、県から移管される公文書・行政刊行物が約5万点、古文書が約29万点、民俗資料が約1千点にのぼります。

このうち整理が済み目録化されたものは、県下及び各都道府県研究機関に公開され、希望者には館内での閲覧（撮影・復写）が許可されています。

本館には、全国的にも大変貴重な代官所史料である高山陣屋・笠松陣屋文書、日本最古の安八郡楡保村の宗門人別改帳などに加え、昨年には「織田信長朱印状」が、今年になってからは「杉田玄白書状」などの重要文書が相次いで収蔵され、全国的に注目されています。

館内エントランスホールでは、年3～4回の史料紹介展が催され、収蔵文書を一般に公開しています。最近では、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康が、美濃の武將に宛てた書状を中心にし



た「三英傑展」、大垣藩医で美濃における蘭学の先駆者であった江馬蘭齋関係の文書を紹介した「美濃蘭学の先駆者、江馬蘭齋」、岐阜県が全国に誇りながら最近廃刊になった児童文学誌を紹介した「コボたちの歩みー岐阜県児童文学の一時代」などを開催しました。次回は、7月7日～9月7日に、「第2回江馬家文書展、江馬家来簡集（仮題）」を予定しています。

また、今年は織田信長生誕460年にあたり、「織田信長朱印状」が収蔵されたこともあり、本館を織田信長に関してすべてが学べる機関としたいと、まず信長について自由に語り合える「歴史ロマン討論会 織田信長を語ろう」を2月と5月に開催しました。1回目は約60名、2



回目は約160名と参加者が増え、信長についての研究成果や、さまざまな疑問点が出され活発に討論が行われました。次回は10月に開催しますので多数ご参加下さい。

- ◇交通 バス＝岐阜駅より15分、岐阜公園高富方面行、本町1丁目下車、徒歩8分
- ◇開館時間 午前9時～午後4時30分
日曜日・祝日は休館
- ◇入館料 無料

（岐阜県歴史資料館資料課長 野村浩太郎）

県内ニュース

◎岐阜県博物館協会総会開かる

平成6年度通常総会が5月13日(金)岐阜県博物館で開催され、事業計画、予算、役員選任等が行われました。会長・副会長は次のとおり

- 名誉会長 梶原 拓 (岐阜県知事)
- 会 長 浅野 勇 (岐阜市長)
- 副会長 日下部尚 (高山市長)
- 青木允夫 (内藤記念くすり博)
- 横山勢津男 (岐阜県博物館)



総会の場で次の4氏が表彰されました。

◇逸見誠三郎氏

多年にわたり内藤記念くすり博物館附属薬用植物園に勤務され、植物園の整備充実に貢献されるとともに、薬用植物等の栽培発芽育成に成功されるなど多大な貢献をされました。

◇河合年朗氏

口腔保健衛生センターの建設に伴ない、全国でも初めての「歯の博物館」の設置と運営に多大な貢献をされました。

◇古川茂樹氏

多年にわたり岐阜県博物館協会の理事として貢献されるとともに、「円空ふるさと館」及び「美並村生活資料館」の建設に多大な貢献をされました。

◇坂本和江氏

多年にわたり飛騨民俗考古館に勤務されるとともに、飛騨史各種資料の研究など博物館界に多大な貢献をされました。

◎岐博協公開講座・

会員研修会等のご案内

- ★第61回公開講座 8月18日(木)
会場 海津町文化センター
内容 輪中と治水—その過去・^{むかし}現在・^{いま}未来—
講師 花園大学教授 伊藤安男氏
- ★第62回公開講座 10月20日(木)
会場 風土記の丘 学習センター
内容 高山の古墳と国分尼寺
—文化財でみる古代史—
講師 高山市教委文化財係長 田中 彰氏
- ★第63回公開講座 冬季
会場 岐阜市科学館
内容・講師 未定
- ★第29回会員研修会 9月下旬
会場 岐阜県博物館
内容 未定
- ★第30回会員研修会 12月上旬
会場 岐阜市科学館
内容 博物館研究—博物館の動向を探る—
講師 榎丹青研究所顧問 佐々木朝登氏
- ★第42回全国博物館大会
11月10日(木)・11日(金) 於 神戸市
- ★第19回東海三県博物館協会交流研修会
10月4日(火)・5日(水) 於 岐阜市

5月13日の総会で平成6・7年度の機関紙委員が選任されました。皆さんのご支援、ご協力をお願いします。

- 委員長 安田 守 (岐阜県博物館)
- 委員 川合康司 (岐阜県博物館)
- 横田 宏 (岐阜市歴史博物館)
- 野尻佳与子 (内藤記念くすり博物館)
- 斎藤尚子 (斎藤美術館)
- 加藤真司 (土岐市美濃陶磁歴史館)
- 三島藤男 (日下部民芸館)
- 水口登美子 (高山屋台会館)